

# 持続可能な社会づくりに取り組む児童の育成 ～「知床学」（海洋教育）を中心とした教育活動～

羅臼町立羅臼小学校

学 級 数 9

(校長 野呂 幸生)

## I 児童の現状と期待する成果

本校では、2年前、児童アンケートにおいて「羅臼町が好きですか。」の項目に「そう思わない。」と回答した児童が過半数を超えていた。この現状を改善するために、学校の教育目標を「ふるさと羅臼町を愛し、未来を担う人として、豊かな心と確かな力を身に付けた児童の育成」と改訂し、教育課程の改善・充実を図った。

特に、各教科等との関連を図りながら、知床の人・物・自然からふるさと羅臼町を包括的にとらえる「知床学（海洋教育）」を総合的な学習の時間に中核に据え、SDGs（持続可能な開発目標）の17の目標を踏まえて学習活動を展開した。17の目標の中では、特に「11 住み続けられるまちづくりを」、「14 海の豊かさを守ろう」、「15 陸の豊かさを守ろう」を重視した。

具体的には、「知床学（海洋教育）」での地域の人・物・自然を活用した学習活動の工夫、「羅臼町昆布図鑑」づくりを通じた地域のよさを再発見する学習活動の工夫、学習を通じて感じた羅臼町のよさを様々な形で発信し、学んだことを行動につなげる学びと行動の連続を目指した学習活動の工夫を行った。

羅臼町のよさを実感できる学習を進める中で、児童が人・物・自然とかかわり、人とつながり、知をつなげ、相互に協力し学び合える能力を高めることにより、自分自身が地域の中で支えられていることを実感し、将来自分が地域の人々や物、自然にその思いを行動として返していくことができる大人へと成長することを目標とした。また、児童アンケートにおいて、「羅臼町が好きである。」と回答する児童の割合が8割を超えることを目指した。

## II 実践の内容

- 1 「知床学」（海洋教育）における知床の人・物・自然からの学び
- 2 「羅臼町昆布図鑑」の学習を通じた地域のよさの再発見
- 3 「ふるさと羅臼町」のよさを知り、守る活動へ

## III 実践の概要

- 1 「知床学」（海洋教育）における知床の人・物・自然からの学び（主にSDGsの11・14の目標）

専門的な知見をもつ羅臼町漁業協同組合職員や知床財団職員、漁業を生業とする保護者を講師として招き、児童が体験を通じて地域の人・物・自然について学ぶことができるようにした。

第2学年では、漁協・地域住民から鮭の生態や稚魚を放流する意味について説明を受け、3年後の帰りを願って稚魚放流を行った。

この学習を通じ、児童は鮭の生態について学ぶだけでなく、羅臼町の自然の豊かさや地域住民の行動から、ふるさと羅臼町に対する思いをより強くもった。この思いは、3年後の「鮭の有効活用～鮭フレーク作り～」につなげ、海の豊かさ大切さを実感させたいと考えている。

学習を終えた児童からは、「鮭が返ってくるのが楽しみ。」という感想だけでなく、「鮭が羅臼町に帰ってこられるように川や山をきれいにしたい。」という声が聞かれた。

第5学年が行った市場見学では、多く種類の魚が羅臼町の海から水揚げされることを知るとともに、そこに关わる地域住民が地域の産業を大切にしていることに触れたり感じたりしたことにより、児童は、「羅臼町の海が素晴らしいということを改めて感じた。」「地域の人たちが守ってきた海を自分たちもしっかりと守りたい。」などの感想をもつことができた。

また、地域住民が児童の学びを支え伝えようとする姿を見て、児童は真剣に学習するようになり、地域の素晴らしさを実感することができた。



【羅臼川での稚魚放流】



【漁協職員の協力による鮭フレークづくり】



【漁協職員から漁の説明を受ける市場見学】

## 2 「羅臼昆布図鑑」の学習を通じた地域のよさの再見（主にSDGsの11・14・15の目標）

第5学年では、これまでの各教科や総合的な学習の時間の学習から羅臼昆布を素材とした「羅臼昆布図鑑」づくりを行った。

まず、児童一人一人が羅臼昆布について課題意識をもち、課題に応じて自然環境や販売・商品開発などのグループを作って課題解決に向けた学習を行った。

そして、調べたり考えたりしたことを「羅臼昆布図鑑」としてまとめ、地域の「ユネスコスクール発表会」や「全国海洋教育サミット」などで外部に発信した。



地域の「ユネスコスクール発表会」や「全国海洋教育サミット」では、地域住民と意見交流したり、全国海洋教育サミット校の児童生徒と交流したりすることにより、地域の素晴らしさを再発見することができた。

特に、東京都で行われた「全国海洋教育サミット」では、「東京羅臼会」の方々と交流することを通して、地域を離れても羅臼町を大切にしている人々の思いに触れることができた。

これらの学習を通じて、児童は単に羅臼昆布について知るだけでなく、地域に対する愛着を深め、自分が大人になったときに、地域を支えたいという気持ちをもつことができた。

さらに、様々な人々との対話や交流から、コミュニケーション能力を高めることができた。

こうした学びの深まりは、児童の自ら課題を見つけ、課題を解決するために進んで行動する主体的な姿につながっている。

本学習の成果は、「ユネスコスクール発表会」や刊行された「羅臼昆布図鑑」を通して、次の学年に受け継がれ、年度を追うごとに学習活動が深化してきている。

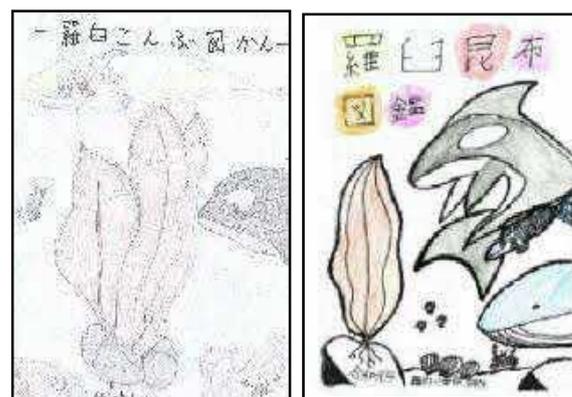
授業後の振り返りでは、児童は羅臼昆布の素晴らしさを知るだけでなく、「地域の方からたくさんお話を聞くことができ、みんなが羅臼町を大切に思っていることを知ることができた。」「羅臼昆布だけでなく、ふるさと羅臼町をもっと大切にしたい。」等の感想をもつことができた。



【全国海洋教育サミットでの「羅臼昆布図鑑」の発表】



【羅臼町ユネスコスクール発表会での発表】



【羅臼昆布図鑑（第1・2版）】

### 3 「ふるさと羅臼町」のよさを知り、守る活動へ（主にSDGsの11の目標）

「羅臼昆布図鑑」の学習を通じて羅臼町のよさや課題を捉えた第6学年は、これまでの学習で学んだ羅臼町のよさを行動とともに発信する学習に取り組んだ。

「羅臼町に残したいもの」をテーマに、自分たちが感じた羅臼町の魅力をリーフレットやポスターで発信するグループ、ボランティアを募って地域の温泉の清掃活動を行うグループ、地域芸能の素晴らしさをインターネットで発信するグループ等を構成し、児童が主体的に活動できるよう工夫した。

温泉の清掃活動を行った児童は、作業後に「作業はとても大変だったけど、この温泉をずっと羅臼町に残したい。」と話するなど、具体的な活動を企画し行動することを通して、地域のために協働する喜びややりがいを実感することができた。

このような高学年の姿を見た下級生にも、日常的に地域のゴミを拾うなど地域のために行動する姿が見られるようになってきた。



【瀬石温泉の清掃活動】

#### IV 実践の成果と課題

##### 1 実践の成果

(1) SDGs の考え方を取り入れて教育課程を編成したことにより、児童が地域社会の一員として、地域を守っていくことの大切さとどのように行動すれば、よりよい方法で地域を持続させていくことができるかを考えられるようになった。

(2) 多くの地域住民に協力を得て学習を行うことにより、より深くふるさとについて知り、郷土に対する誇りや愛着を育むことはもとより、自分たちが大人になったときに地域を支えることの期待感を高めることができた。

さらに、多くの人々、物との出会いを通して、自らの生き方を考えることができ、将来の自分の職業選択や今の学びをどのように将来につなげていくか考える機会となった。

10月に第6学年の児童に行ったアンケートでは「あなたは羅臼町が好きですか。」の設問に対して、100%の児童が「羅臼町が好き。」と回答した。その理由として「自然が多く、たくさんの生き物に囲まれ、町民一人一人が優しいから、羅臼町は私の自慢のふるさとです。」などの記述が見られ、実践の成果が現れていると考えられる。

##### 羅臼町に残したいもの 場所グループ

私達は、総合の時間に羅臼に残したい物を考えました。私達の羅臼の守りたいところは、『瀬石温泉』です！  
理由…羅臼にはたくさんの温泉がありますが、きちんと、ていきてきにきれいにされています。ですが、瀬石温泉は、海のそばにあるため、そうじをしても、あまじきれいきがじやくされないので、ですから、私達がそうじをして、瀬石温泉をずっと思っています！  
そこで！私達は、みんなに瀬石温泉をそうじを、しました！みんなも羅臼町に、瀬石温泉を残すために、きれいに、つかいましょう！

場所グループ  
令和2年度  
羅臼町立羅臼小学校 6年



【瀬石温泉の清掃ボランティア後に児童が温泉に掲示したポスター】

##### 2 今後の課題

持続可能な社会を実現するために児童が今後どのように活動すべきか考えられるよう、学校全体で、学年の発達の段階に応じた系統的・継続的な学習活動を設定する必要がある。